

られない。

コーチの育成は急を要する。新しいサッカーの波は、日本全国、津々浦々に及んでいる。どのような辺地でも正しいサッカーの指導を受けられるようになるためには、まだ長い時間を要するだろう。しかし、ほおっておいてよいわけではない。さらに、高校、大学の指導者の育成も急務である。もっとも技能の発達する時期の担当者は、それだけ責任も大きい。

施設の拡充は、もとより容易ではない。しかし、困難が放置の理由であってはならない。ひ

とり、サッカー協会だけの力で果たしうるものではない面もある。政府や地方自治体を動かすだけの情熱と、政治的な動きも必要だろう。スポーツのもつ本来の価値に対する世論のリードも重要だと思う。

日本ほど、スポーツを愛好し、その成績を気にしながら、裏付けとなるべき施設や政策の貧困な国の例を私はまだ知らない。

最後に、今メキシコ大会に際して、日本チームに寄せられた内外からのご厚情に対し、厚く御礼を申し上げて、むすびとしたい。

漕 艇

監 督 四 方 久 男

1. 選手選考の経緯

オリンピック・メキシコ大会に対する強化計画は42年度全日本選手権までは自主トレーニングを主体に協会指導を行ない、41年度には第2回世界選手権（ユーゴ）に付フォアとシングルスカル、42年度には北米選手権（カナダ）にエイト、付フォア、シングルスカルを派遣し戦力の増強を図ったが、年来の悩みである学生主体のクルーにあっては毎年優秀選手の卒業に伴い、そのクルーの弱体化防止は社会事情もありメキシコ大会まで保有することのむずかしさに苦慮した。

長期にわたるトレーニングを必要とするため、社会人クルーにあっては勤務の余暇を利用して練習するにしても、職場の関係で十分な時間をとることもできなかったが、従来にない成果があがったことは、今後の指針に大いに役立つものと思われる。

以上の特殊事情から、メキシコ代表の決定時期は申込みギリギリの43年8月末の全日本選手権大会と決定し、次のような計画をたてた。

42年度全日本選手権における優秀クルーを強化クルーに指定し、同年12月中旬にトライアルを行ない、指定クルーに対し他クルーの挑戦レースを行ない、その結果により新しく強化クルーを選定した。同様、挑戦レースを43年3月24日、5月25日、6月23日、7月18日の4回にわたり目標タイムを設定し、そのタイムを突破することを目標とした。

6月と7月にはJOC委員の査察を受け、オリンピック代表選考の資料とされたが、コースコンディションに左右され、JOCが目標とした7月には派遣の承認を得るに至らなかった。各クルーは協会の目標にしたがい8月の全日本にすべてを集中しているため、その時点における成績によって派遣の是非を決定するようJOCの承認を得てその成果を待った。

全日本における成績は、エイトにおいて協会目標タイムの6分5秒以内に対し、同志社大学が6分1秒4を記録した。

この記録は、大会までには上昇することも考えられるとして派遣決定をみるに至った。

シングルスカルの伊藤君は6月のチャレンジ・レースにおいて派遣決定をみており、従来にないスカラーとして大会における活躍が期待された。

しかし、高地対策については、その必要性は十分承知しながら、国内においてはボートとして利用する適地もなく、ブツケ本番でいくより仕方がなかったため、早目にメキシコ入りすることにした。

使用艇の搬入においては、台風シーズンに遭遇して予定期日に出帆不能となり、約1週間の遅れをみた。そのうえアカブルコで港湾ストにあい、揚陸地の変更等でまたまた3日間の遅れをみ、現地における練習に大きな支障のあったことは誠に残念であった。

2. 強化策および臨戦対策

(1) 国内における強化策

(1) エイト・クルーの大半を占める若い選手について、技術、体力、精神面で鍛えあげ、平均レベルの向上をはかった。クルーの構成は4年2名、3年4名、2年2名。

(2) ボートにおける高地の影響はどの程度なのかはわからなかったが、呼吸循環系統を鍛えるために、練習内容をインターバルと長いライトパドルにしぼり、あわせて陸上ではインターバル・ランニングを行なった。

(3) 国内予選における実力(6分1秒4)を東京大会での西独クルー(5分54秒)と比較した場合、ウィークポイントとして目立つのは第1クォーター(スタート~500m)と第3クォーター(1,000m~1,500m)である。500mで約1艇身の差が予想されるが、国内予選を通じてスタートでの負けを知らないクルーにとって、これは致命的なウィークポイントである。以上の対策として次のことを試みた。

(i) 第1クォーター(スタート)

従来のスタートはダッシュ6本(P60)、力漕15本(P50)および10本(P40)であったが、これにP43の力漕を10本加えてみた。結果は従来のスタートに比べてへばりがひどく、そのうえコンスタントの伸びもなくなり、逆に500mのタイムを2秒ほど悪くすることとなった。約10日間にわたってへばりの克服を試みたが、スピードと体力の限界を感じたので、従来のスタートで臨むことにした。無風の条件で500m1分26秒のラップタイムを破るには、体力、技術、用具(オールなど)について抜本的に研究しなおす必要がある。

(ii) 第3クォーター

タイム落ちの直接原因は技術面にあった。すなわち、キャッチの戻り、フィニッシュのはね上げ、フォワード速度の不一致、蹴りの乱れである。しかし、第3クォーターは心身ともに最

も苦しいところなので、技術的な乱れは体力の消耗によるものと考えられる。また、こうした乱れがキャリアの少ない若い選手に一樣に現われたことから、短時日に克服することはむずかしいと思われる。

(2) 現地における臨戦対策

(1) クエルナバカでの低地休養は取りやめることにした。理由は、④自艇の到着が10月2日(レース10日前)になり、正味の乗艇練習は1週間しかできないということと、自艇とはいえ1カ月以上も乗っていないので慣れる必要を感じたため。⑤最初の1週間は借艇による漕ぎにくさと、高地の予想外の影響のために予定していたスケジュールが消化できておらず、レース・コンディションにもってゆくの約1週間ぐらいは必要だと判断したためである。

(2) 高地の影響は予想以上に大きく、当初のスケジュールを大幅に修正しなければならなかった。水上練習でのパドルは15本程度、ライトパドルは30本程度で頭痛を訴え、陸上でのランニングも落とさねばならなかった。パドルの本数は1週間を目標に、毎日少しずつ本数を多くしていったが、50本のパドルをこなすのに10日間を要した。

スタート・ダッシュの消耗もはげしく、力漕時のピッチを2つ落としたが、コンスタントにつなぐのに2週間を要した。

疲労の回復力は平地に比べて半減し、1日の休みでは80%ぐらいしか回復しなかった。疲労の累積は目にみえていたが、一方スケジュールの消化に追われて、エイトは低地休養も取りやめて練習を強行しなければならなかった。

予選の時点では、スタートなしのコンスタント・ピッチで1,000mを引けるようにはなっていたが、スタートをつけた場合は700mでつぶれる状態だった。酸素不足に対する選手の恐怖心も大きく、レースではこの恐怖心がスタートから現われてしまった。

(3) 国際レースの経験をもたない選手たちを、いくらかでも雰囲気慣れさせるべく、練習時

には可能な限り外国クルーと並べさせた。これは、かなりの効果をあげたように思う。

次に、シングルスカルの場合もエイト同様、国内の強化策は、呼吸循環系統の機能の向上を目的にインターバル・トレーニングを中心に行なった。しかも従来は80%程度の力でペースの配分づくりを中心にしてきたものを、心臓、肺臓に負荷をより以上かけるため、全力によるインターバル・トレーニングとした。また国内予選の行なわれるまでは、100mを22秒で漕ぐペースづくりを行なったが、これを少しでも向上させるよう技術面における艇速に対してマイナスとなる要素を減らす努力を行なった。

一方、現地における臨戦対策としては、高地の影響の度合いをはっきりつかみ、それを生かして高地への順応を行ない、次にシングルスカルの2,000mのペースへと結びつけることを、試合前までの3週間弱の期間をそれぞれ約1週間ずつあてて行った。

3. 試合経過および戦評

エイト予選

10月13日 13時25分 コンディション 東南東(横)0.2m

〔経過および戦評〕

スタートは西独のフライングがあつて、定刻より10分遅れて再スタート。スタート・ダッシュは横一線。250mで西独とカナダが飛び出し、他はだいたい平行。300m付近で日本とメキシコが落ち、他は西独、カナダ、オーストラリア、チェコの順でよく艇速を伸ばした。700mあたりから日本はメキシコにじりじりと差をつけたが、これはメキシコの落ち方がひどかったため、日本の動きはますます鈍くなり、リズムも出ないままトップ・グループとの差は大きくなる一方だった。1,700mからはフォームも完全にくずれ、バランスさえとれないまま、ただ気力だけで動いている状態となって、メキシコにも逆転された。

スタート・ダッシュとそれに続く力漕は互角

でまずまずの出来だったが、コンスタント・ピッチに落とす際に呼吸を乱し、リズムを失ってしまった。このコンディションならば、500mを1分28秒、1,000mを3分3秒ぐらいで漕げるはずだったが、コンスタントを悪くした原因として最も大きいのは、後半に対する不安であったらと思う。練習では1,500mを1度引いたきりで、後は1,000mまでしかやっていなかったところへもってきて、レースの前に、船台で倒れて次々と担架で運ばれてゆく前漕者たちの姿を見て、大きなショックを受けたようだった。次に疲労の問題である。自艇が到着して本格的なトレーニングに入ったのは10月3日であったが、ちょうどその頃から不慣れな食事による食欲減退がひどくなり、体重も練習量からは考えられないくらい、減少しはじめた。練習時のタイムも11日をピークにして下降線をたどった。

700mあたりで若い選手たちがフォームをくずしてしまつたが、この現象はメキシコへ入ってから著しい特色であり、選手のキャリアによる格差がはっきりと表面に出た。

エイト敗者復活戦

10月15日 11時50分 コンディション 北々西(斜め逆)1.6m

〔経過および戦評〕

予選のときにも累積疲労が感じられたので、前日(14日)は午前中を休み、午後のみ軽い練習をしたが、疲労は抜けなかった。

スタート・ダッシュと力漕は横一線で、予選同様まずまずの出来であった。コンスタントに落とす際にやはり乱れてしまつたが、その後よく持ちこたえて、500mではトップのソ連に1艇身についていった。しかし、700m付近から若い選手が次々にフォームをくずしはじめ、古い選手も1,000mを過ぎるころからは1人また1人とつぶれていった。1,700mからメキシコにまたしても逆転された。

エイト順位決定戦

10月18日 13時 コンディション 東0.8m



漕艇の競技会場となったソチミルコの漕艇・カヌーコース

〔経過および戦評〕

16, 17の両日はいかにして疲労を回復するかという命題だけが残った。休養の方法としてはクエルナバカへ降りることも考えられたが、一方、現在のような希望のない状況でコースを離れば、戦意を喪失する危険もあった。結局、気力の持続に的をしぼり、練習を続行することにした。

レースは良いスタートを切った。250mまではヨーロッパ勢と並び、メキシコは半艇身遅れた。300mでオランダがややリード、日本はコンスタントでもリズムを保ち、東独、イギリスにキャンパスの差でつづく。500m……。

600mあたりから艇速が伸び、イギリスとの差を1/3艇身とつめたが、前2回のレース同様700mでくずれてしまった。気力は充実していたものの、疲労が激しく、当日は朝から体調をこわしていた選手もあって、1,000m以後は今にも倒れそうな状態となり、メキシコにも逆転されたうえ大差をつけられる結果となった。

〔総評〕

外国クルーについて見聞したところをまとめると次のとおり。

(ソ連) コーカサス地方の高地でトレーニングを積んできているとかで、9月末にわれわれが到着したときには、すでに高地の影響らしき兆候は練習タイムにもみられなかった。

優勝候補の筆頭と目されていたが、レース時には調子をくずしてしまった。

(アメリカ) コロラド州の高地でトレーニング中とのことで、メキシコ入りはいちばん遅く、レースの1週間前だった。

コースに入ったときはすでにレース・コンディションは整っていて、補欠選手の陸上でのランニングをみている、高地対策は万全といった印象を受けた。

(ニュージーランド、カナダおよびヨーロッパ勢) メキシコ入りはニュージーランド、西独、オース

トラリアが9月初旬で最も早く、オランダ、カナダ、イギリス、チェコはやや遅れて9月中旬とのことだった。われわれが到着したところには西独、オーストラリアも500mを引くのがやっとなで、とても2,000mを引ける状態には見えなかったが、それから、1週間ほどの間に急速に調子を上げていった。

(日本) 初めの1週間は借艇していたためもあって、本格的なトレーニングは自艇到着後の10日間となった。

高地への順化はヨーロッパ・クルーの例でもだいたい3~4週間を要しており、10日~2週間ではちょっと無理があったようだ。疲労は聞いていたとおり2週間で限界にくるようだった。また疲労の回復には、高地での休養はあまり効果はなく、やはり低地休養を必要とするように思われた。

シングルスカル予選

10月13日 10時30分 コンディション 北西(斜め逆) 2.2m

〔経過および戦評〕

スタートは各艇並んできれいに飛び出し、日本は練習当時のペースで順調に500, 1,000mを3位で通過する。1,000mをトップで通過した西独はピッチ37と高く多少オーバー・ペースぎみで飛ばしており、日本との差は1,000mで約

3艇身と開いた。しかし2位との差は1艇身弱と水があかず、1,000mから勝負を決するところとなる。ところが、1,000mを過ぎるころから高地の酸素不足の影響を極端に受け、疲労が一気に出てきてしまった。その結果、脚、肩のしびれにより身体が思うように動かなくなり、艇速がまたたく間に落ちて、1,500m手前でアルゼンチンに無抵抗のまま抜かれ、さらにチェコにも追いつかれ、1,500m過ぎ各国選手がラストパートでピッチを上げる中を、フラフラの状態であまり気力のみでゴールインした。

シングルスカル敗者復活戦

10月15日 10時 コンディション 風なし

〔経過および戦評〕

日本、ソ連、イギリス、チェコ、スイスの5艇によるレース予定であったが、試合前のウォーミングアップでスイスの選手が高地の影響を受けて倒れたため、4クルーによって争われることとなった。スタートは日本、ソ連、イギリスのフライングにより再スタートとなったが、2回のフライングを行なうと失格となるため慎重になりすぎ、他艇に約半艇身も出られる結果となった。予選では高地の影響で後半のタイム落ちがひどかったため、これを防止する目的で敗者復活戦ではオールのアウトボードを約1.5cm短くした。これが影響して、500mでは他艇にさらに差を広げられ、トップのイギリスに2艇身、2, 3位のソ連、チェコに1艇身と離される。そして700m付近では3位チェコに2艇身とされたが、1,000m前後では良いリズムにのり、じりじりと追い上げ約1艇身差と後半への希望をつないだ。しかし1,500mを過ぎると他艇はラストパートに入り、1艇身までにつめた差を、ここから大きく開かれ、準決勝進出への道を失った。

予選、敗者復活戦を通じ、1,000mまでは目標ペースで順調に漕げたが、問題は1,000m以降で、これが高地のためにひどい影響を受けたといえよう。結局、この点は高地の苦しさを乗り切れなかったためではあるが、特に漕艇とい

う非常に体力、精神面できつい種目においては、試合までに3週間弱の高地練習では順応しきれない。外国クルーは9月初めにすでにメキシコに乗り込むか、あるいは自国で高地トレーニングを行っていた。日本の場合、高地の練習場となると適当な場所がないのであるから、少なくとも9月初めにはメキシコ入りすべきであった。結局、練習のスケジュールも高地の苦しさを当初の予定をこなし苦しさを克服するどころではなく、逆に疲労が蓄積されてゆき、スケジュールを変更せざるを得ない状態となった。

4. 彼我の戦力分析と将来の展望・対策

今回のオリンピック・レースにおける外国クルーとの力量差には、高地という特殊条件があるため分析がむずかしいが、戸田における記録とメキシコにおけるレース2週間前の外国クルーのタイムなどから推定すると、およそ15秒程度の差があるものと思われる。15秒差のうちの最も大きなものは、なんといっても体力差であるが、しかし技術、艇、オールによる差もかなりの部分を占めているように思われた。

体力差は早急に解決することは不可能であろうが、技術面や用具については改善が可能であるし、またやらねばならないことである。技術面のレベルアップとある程度の体力増強の方法として、まず考えられるのがナショナル・クルーの編成である。

ナショナル・クルーの成功例として、ニュージーランドについて聞きかじったところを記してみたい。

東京大会におけるニュージーランドは日本以下の成績であったが、その後ナショナル・クルーを編成し、3年後(昨年)には北米選手権で優勝するまでになった。今回のオリンピックでは、昨年のクルーのうち2名が入れ替わったとすることで、選手も学生、社会人の混合である。決勝の成績こそ4位に終わったが、予選ではアメリカ、ソ連、東独、オランダといったトップ

プ・レベルのクルーを相手に楽勝しており、舵手付フォアの堂々たる優勝とともに特筆されるべきことだと思ふ。

次に考えられるのがキャリアの充実ということである。キャリアは主として技術的な問題のように考えられるが、体力の効果的な消費といった面からみれば、消極的ではあるが体力面の解決にも役立つものである。現在日本のボート界は実業団、大学、高校という3層から成っているが、これら3者はそれぞれ異なった目的に向かって強化努力を傾けている。オリンピックを頂点とするシェル艇の強化となると大学層に限定され、他はわずかに二、三の実業団を数えるのみである。大学の4年間では国際レベルのキャリアを期待するのは無理であり、これをヨーロッパ並みにもってゆくためには、高校、大学、実業団という一貫した養成過程が必要だと思ふ。この点については他の競技種目一特に球技一をみれば明らかである。そのためには実業団も高校もシェル艇に統一せねば大きな効果は期待できない。一部の大学には高校の経験者が入っているが、高校におけるナックル艇の経験者は体力面以外にはほとんどメリットがなく、技術的にはマイナス要素もかなり出ている。ナックル艇とシェル艇の相違は、野球における軟式と硬式の相違のようなもので、高校や実業団

がすべて軟式になった場合、硬式のプロ野球のレベルは極端に低下するであろうと思ふ。

艇の改善については協会技術部と造船会社に頼るほかないが、現在の艇は理論に傾きすぎて、漕手の乗りやすさ、漕ぎ易さといった面や、レースの過程で艇速にかなりの波がある点を考慮する必要があるのではないか。

オールについてはクルー単位による経験的な改善が可能であると思ふが、漕法の問題をも含めて、各コーチ間の意見および経験の交換を密にすることが必要であろう。

以上の諸問題が解決されれば、国際レースにおける優勝はともかくとして、決勝進出のチャンスはつかめるものと確信している。

次にシングルスカルについて考えてみると、もちろん体力、技術面で若干の劣勢はあったが、今回の敗因は高地対策のまずさであり、日本が決して世界一流のスカラーとこれほどまでの大きな実力差があったとは考えられない。日本人の場合は体格の大きい選手でもエイト、フォアとなると外人との差は身長で10~15cm、体重で15~20kgであるが、スカル種目においては、今回の1位から3位まではともに身長が180cm程度で日本人と同等であったことから、日本人でも前記対策により十分戦えると思ふ。

ホッケー

監督 市川 日出男

1. 選手選考の経緯

昭和42年10月、ロンドンで行なわれた国際ホッケー連盟主催のプレ・オリンピック大会に参加した日本チームは、その大会成績(7位)および各試合内容からみて、守備陣はともかくも攻撃人員の手薄を痛感し、オリンピック年の強化の主目的を攻撃力の増強においた。また、経験豊かな外国勢に対して非常な若さをさらけ出したこともあって、東京大会C F田中およびアジア大会(第5回)のL I吉村を戦列に復帰させた。結果的にみて、比較的若い吉村の場合は予想どおりとあってよいが、田中の場合は年齢からくる悪条件を克服しえなかったことは残念であった。最終メンバーに近い編成をもって、4月、5月、6月の各10日間この強化合宿を実施したのち6月28日出発、7月30日帰国の予定で、33日間17試合の国際遠征を実施した。主たる目的は同様に攻撃陣の整備と悪条件下における連戦に対する訓練においた。

対戦国は、パキスタン(5試合)、イタリア(2試合)、西独(5試合)、スペイン(2試合)、カナダ(3試合)の5カ国計17試合であった。この遠征結果(9勝4敗4引分け)の中で、特にパキスタン・ナショナルとの試合に3敗したことから、中盤守備力の不足を痛感して、従来の5、3、2のシステムを守備に1名増員し4、2、3、1システムに変更したのであるが、幸か不幸かこの陣容変更は、遠征の段階においてはさしたる破綻もみせず、むしろ攻守とも割合

スムーズな回転をみせていた。ただ、最終カナダ戦の2試合がいずれもカナダの非常なスピードと執拗なマークにあって大苦戦し、1勝1分けとはしたものの、持てる戦力から考えて非常にまずい試合であった。このゲームからも、メキシコ大会での不振の原因を察知することができる。われわれとしては、そのことに気付かぬわけではもちろんなかったけれども、対スペイン戦および対西独戦の成功の陰に埋もれて、4 F W編成に対して見通しをもちすぎたことは確かに反省されるべきところである。

最終段階における欧州遠征終了後の8月上旬、札幌で全日本学生選手権大会を通過し、8月12日から19日まで最後の選考合宿を行ない、9日正式にオリンピック・メンバーを発表した。

日本ホッケー協会は慣例として特に選考委員会をもたず、選手の決定は強化部長、監督および強化コーチに一任して、最終決定について理事会がこれを承認する建前となっていた。このこと自体、非常にすっきりした形で、なんの問題もなく、現在の日本がもつ最強メンバーを選考することができた。

9月に入ってNHK杯が開催され(三ツ沢)、これに参加を認められたナショナル・チームは3試合を文句なく勝ち抜いた。しかしながら、どの試合も前半の得点が少なく、後半に試合を決めたような形が多かった。特に走りまわる学生チームに対して、個人技にまさることから、苦戦とまではいかぬが、前半得点が少なかった。このことは、やはり国内戦を技術と経験で戦ったといえるかもしれない。